

コース	氏名	論文題目名	コース	氏名	論文題目名
情報	大前 信芳	思春期の成長の数学的特徴づけ	環境	浅野 慎一	微生物による汚水の浄化 —汚水中の脱窒菌—
"	川原 章子	リーダーシップ条件効果に関する動機論的研究	"	磯部 仁志	偏微分方程式の数値解法
"	栗田 洋子	デンショバトにおけるShort-Term memory (短期記憶)	"	今出 秀樹	山火事跡地における植生回復に関する生態学的研究
"	霜田 裕子	並列処理による配置問題に関する研究	"	植田 哲司	破砕帯地すべり地における地下探査
"	新谷 順子	漢字入力システム	"	内田 智久	大気環境学における統計的解析 —大気質シミュレーション・システム—
"	杉本 篤	多変量品質管理法の研究	"	宇都宮 肇	表面物性の理論的研究
"	津崎 京子	非言語的コミュニケーションに関する実験的研究	"	大藤 智明	東広島市南方黒瀬盆地の地盤地質について
"	手嶋 美雪	文字の認知のラテラルリティに関する研究	"	岡田 裕之	化学農法と自然農法における昆虫相の比較
"	中園 京子	不安と認知的評定に関する実験的研究	"	佐藤 隆	破砕帯地すべり域における地下水調査
"	野口 千春	グラフのディスプレイのためのソフトの開発	"	鹿野 修二	農村定住技術としての集落排水処理技術 —混住化地域の水環境管理—
"	波多野真美	人間の短期記憶場面の視覚誘発電位	"	品川 博美	緑化センター及びその周辺における雑草の動態
"	原田 敬子	設計言語と機能検証に関する研究	"	高岡 里美	岡山県備前市片上港及びその周辺海底の有孔虫群集の環境論的基礎研究
"	藤井 智	数式処理の研究	"	多々納晴男	広島局の局地風に関する気候学的考察 —パイロットバルーンによる風の立体的構造の把握—
"	松本比呂志	プログラムの編集処理に関する研究	"	谷本 茂	山林焼跡地に及ぼす降雨の影響
"	水野上智章	連続曲線の簡単な表現法の研究	"	坪倉 直子	副腎皮質ミクロソームにおけるチトクロムb5の精製と性質
"	宮岡 博志	簡単なグラフィックデータ入出力の一方法	"	平岡 耕一	GdMn ₂ とその水素化物の核磁気共鳴吸収
"	森田 昭弘	2層配線の一方法	"	福高永太郎	P S II機能の再構成の試み
"	雪本 篤	コンピュータによる配置の良否の自動チェックの一方法	"	松尾 洋司	緑化センターにおける水収支
環境	大橋 健造	非晶質構造のモデル	"	山本 真	森林生態系における物質循環
"	梶谷 英昭	愛媛県周桑郡丹原町鞍瀬川流域三波川帯の地質学的・環境論的研究	"	渡辺 純二	カルコゲナイド・スピネルのラマン散乱
"	野村美知哉	黒瀬川流域の水収支	"	渡邊 朋也	カプトエビの生態学的研究
"	原頭 基司	副腎ミクロソームのチトクロムP-450 C ²¹ の反応機構			
"	東 敏生	流域の土地利用形態が河川水汚濁(濁度)に及ぼす影響			

座談会

「総合科学部の特性及びそのヴィジョン」を語る —学部長を囲んで—

編 集 部

日 時 昭和56年1月16日(金)
3:10~4:45 p. m.
出席者 式部 久(学部長)
鈴木 修次(地域文化)
志村 賢男(社会文化)
重中 義信(情報行動)
岡本 哲彦(環境科学・基礎科学)
倉石 晋(" ・自然環境)
坂本 公延(外国語)
司 会 田村 一郎(広報委員長)

司会 本日は、『飛翔』の座談会のために、お忙しいところを快よく時間をおさき頂きまして、誠に有難うございます。例年『飛翔』の「新入生歓迎特集号」では、学部長の挨拶を掲載させて頂いていますが、本年はちょっと趣向を変えて、もっと砕けたかたちで、学部長を囲んで、本日お集りの諸先生方に『総合科学部の特性およびそのヴィジョン』について、色々お話しを伺いたいと思います。

総合科学部は、昭和49年に創設され、広領域の学際研究・教育を行う非常にユニークな学部であるという事で、全国から注目をされていますし、また、学生達もその新しい学問を開く先駆者になろうとしてこの学部を志望して入って来るわけです。『飛翔』第16号のアンケート調査などによりますと、非常に意欲に満ちた学生達が入ってきています。ところが、将来の進路を決めるためのモラトリアムを一年間もらっても、はたしてそれを有効に使っているかどうかについては、いささかの疑問が残るようにも思われます。それで、今回は新入生達が入って来て、(1)学部でどのような先生方の中で、どのような勉強をするか、(2)あるいは総合科学部の特性を生かす勉強とはどのようなものであるのか、(3)あるいは総合科学部を将来卒業してその学生達が社会に巣立った時に、どのような道が開けているか、というような点についてお話しを伺いたいと思います。

総合科学部創設の趣旨

司会 まず皮切りとして、学部長の方から総合科学部創設の趣旨についてお話しを伺いたいと思います。
式部 今から数えると二年前になると思いますが、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスの七大学を選んで訪問したことがあります。「総合科学部 (Faculty of Integrated Arts & Sciences) からやって来た」と言いますと、その Integrated というところに、どこでも大変興味をもたれました。「何をもとにした総合か」と聞かれる。「一口に言えばヒューマニティをもとにした総合」と答えましたが、充分説得的だったかどうか。—————

しかし総合科学部のいう「総合」は、基本的には理念的なもので、人間性の立場に立ち帰って眼前の問題をとらえ直すという姿勢、そこに「総合」の基本的な意味があると、私は考えています。



総合科学部は従来の日本の大学教育に対する批判というか反省というか、そういうものから生まれて来ました。従来の日本の大学は専門主義に固まり過ぎてはいないか、学科と学科との間の壁が硬すぎはしないか。もっと柔軟に、幅広く専攻を考えてもよいのではないか。そういうことが一般に言われて来ていました。そういう反省に立って新しい学部教育の形態を考えたのです。

C. P. スノーというイギリスの評論家は『二つの文化』という評論のなかで、現在の学問の世界では、一方では自然科学の先端的学問については文科系の

先生は非常に冷淡な消極的な理解しか示さないし、他方、自然科学の先生方もまた、文化というものの、人間精神のありようについては余り興味を示さない、両方が別れ別れになっていると批判しています。そして現代の教育制度に問題があると指摘している。

これはイギリスのことですが、それと同じようなこと、あるいはそれ以上のことが日本の大学社会にあるでしょう。それにどう対処するかが、総合科学部の設立の課題になったといつてよいでしょう。

もう一つ、これは日本の大学制度にのみあることですが、「一般教育」と「専門教育」という区別があって、両者のつながりがうまくいっていない。一般教育は、必ずしも本人の専門や将来の職業とは直結しない広い人間としての教養、専門教育の方は将来の職業を視野に入れての個別分野、という考え方ですが、どうもこの二つがうまく調和しないうらみがある。

総合科学部はこのような反省をもとに、新しいヴィジョンをもった学部をつくらうとした、総合性をもった大学教育の場をつくらうとした、といつてよいでしょう。そして総合性という、結局、人間性の立場に立つ、ということしかない。J. S. ミルは、St. Andrews 大学の学長就任演説で、「大学は、職業教育の場である前に、人間教育の場でなければならない」といった趣旨のことを言っています。一世紀も前のことですが、その精神は現代にも生かされる、あるいは現代だからこそ必要だという面もあるでしょう。総合科学部はそういう精神というか理念というか、あるいはヴィジョンといつてもよい、そういうものを体現した学部であろうとしている、そう言つてよいでしょう。

その総合性の理念を具体的に組織の上でどう展開するか、これが次に問題になるでしょうが、この点については、学部の講座組織やコース編成によって内容を知るのが一番てっとりばやいでしょう。地域文化コース、社会文化コース、情報科学コース、環境科学コース、この四コースが学生の側から見た場合の基本的な分野区分ですし、コースによってはそれが更に若干の下位区分をもっている。そして、外国語の諸講座があり、保健体育の講座がある。

このなかには、哲学・心理学・数学・物理学といった基礎科学の分野も含まれておれば、開発計画や情報処理などに関する応用科学の分野も含まれており、文科系の科目も理科系の科目も包含されている。C. P. スノーの言うような偏った教養といつた心配

はありません。だが、そうした広い範囲の諸科目をなんとなく手広く勉強するのではものになりません。そこで、現代の学界や社会の要請も考慮にいれ、学生の卒業後の進路なども考慮にいれて編成されたのが、さきあげた四コースになるわけです。

この四コースは、それぞれが学際的な編成になっています。たとえば地域研究コースにアジア研究の講座がある。アジアの歴史だけでなく、また文学や語学だけというのではなく、社会や政治・経済もふくまれる。一人の学生がそれを全部修めるといふことは不可能ですが、少なくともそのなかの二つの科目ぐらいには充分親しんで、アジアならアジアの地域について広い視野を養ってほしい、というのが創設に当たつてのわれわれの狙いです。現代の国際政治を知るためには毎日の新聞に出てくるような政治の具体的な動きそのものをフォローすることも必要だが、ただそれだけでなく、それぞれの民族・国家のもつ文化の伝統を知る必要がある。それには現地での社会調査も有効だが、他方ではまた、それが古い国なら、その国の古典を知る必要もある。むやみに手をひろげたのでは蚊蜂取らずになるが、そういう広いつながりを意識して勉強していくことが必要になる。

社会文化の方面でいうなら、日本では官公庁や大会社からの求人は法学部に集中するようですが、法学部で法律解釈の勉強をしたり法律制定の技術を学んだ者が、そういう方面の働き手として本当にふさわしいのかどうか、疑問のところがあつます。法律と同時に経済についての深い教養が必要なのではないか、あるいはもっと広く、人間というもの、文化というものについて考えていく姿勢や訓練をもった者が求められるのではないか、それも考えられる。オックスフォードにたしかP. P. H.と呼ばれるコースがありますが、これは哲学・政治・歴史の頭文字をとつて組み合わせたもので、その修了者が政治の分野で大をなしていることが多いと聞きます。将来政治の世界に進出しようと考えている者が、ただ政治学だけを修めるのではなく、プラトンやアリストテレスを本格的に読み、イギリスの歴史、世界の歴史をしっかりと勉強する。

あるいは、生命科学の話を知ると、最近の先端的な学問は生物学なら生物学だけの素養ではついていけない。物理学や化学も相当やっつけていなければならない、それでもつて始めて新しい研究も進められるといひます。

そうした状況を背景にして、新しいヴィジョンを

もって人間教育にとりくもうとしているのが総合科学部です。相当の努力や意欲が、教官にも学生にも必要になります。

司会 では、四コース16講座を持つ総合科学部の現状紹介の意味で、地域文化、社会文化、情報行動科学、環境科学の各コース毎に、学生の質なり、教官の特徴なり、教育内容、カリキュラムなどを御紹介願います。

地域文化コースの多様な指導力

鈴木 地域は、日本研究、アジア研究、ヨーロッパ研究、英米研究、比較文化研究とあるわけですが、その中の先生方の構成は、地域研究の専門の方、文学部の構成にあるような哲学、文学、史学そういう面でも十分に活躍頂けるようなすぐれた先生がいらっしやる。さらにここの地域研究のひとつの特徴は、バックとして語学の先生方が非常にたくさんいらっしやって、多面的な語学が訓練出来るということもあります。例えば、朝鮮語について勉強したいと思うなら、そのチャンスはあるし、それに更に文化人類学、宗教社会学、地理学、美学といった、そういう面の方々も、それぞれの講座のどこかに所属していらっしやる訳です。これだけの多面的な先生方が、ひとつの講座の中で揃っているというのは、従前の学部・小講座を前提とする大学では例を見ないことと思う。そういう意味では大変ユニークな学部であると言えます。

ただ問題は、そういう多様な指導力を学生諸君がどのように活用するかということだと思います。総合科学と一口に言いますが、「総合科学」というようなパターン化された学問分野が別にあるわけではない。総合研究の必要というのは、ある問題を追求するにあたって、従前の専門領域の区分ではまにあわない問題がいろいろと出てくる。そのために総合研究の工夫と、さらにはそれに対する指導力の充足が求められるわけですし、そういう点からまず、学生諸君は、自分の生涯の方向を考えながら、それぞれに問題意識を持つことが必要ではないか。そしてその問題にあわせてそれをどのように組織化するか、自分で主体的に編成してゆくということが大切です。

その問題意識の追求にあたっては、総合科学部の中にそれぞれ多面的な専門家がいらっしやるわけですから、そうした多彩な指導を受けていただきたい

わけです。早くその問題の方向を設定し、自分なりのカリキュラムを作って、進めて行くという事と同時に、大学の四年間というのは、長いようで大変短いですから、その目標達成のための訓練、これは日常の学部生活ということになりますが、それを深めることが必要なのではないかと思います。卒直に申して、総合科学部の我々の授業を受ける人々は、ある意味では魅力もあるようで、他学部の学生諸君もしばしば聴講に参加するわけです。ところが、私の場合文学部の学生が多いわけですが、授業ではどちらかと言えば文学部の学生が目を見つめています。何故かということ、最初からある専門領域を持って、その方向で授業を受けている。ところが総合科学部の授業に参加すると、従前の小講座を前提とする学部活動では見られない様な視点が、時々発言の中に出てくるのを発見し、それに対してある種の魅惑を感じるという面があるようです。そういう点では、総合科学部の人達は、どうも問題意識そのものが漠然としていて、同時に自分のやりたいと思う専攻領域についても、まだ曖昧だということもあるのかも知れませんが、残念な事が多い。

学生諸君は、早く自分の問題意識を持つとともに、多方面にわたって人材を集めてきているわけですから、そういう先生方の指導力を活用して、進めるようにしてほしいと希望します。

総合科学部の地域研究は、日本の大学を見渡しても大変珍しい存在なので、なんとかこれを健全に発展させて行きたいと思っています。それには学生諸君も一緒に含めて、お互い作って行こうという意欲を持つてほしいか、そのことを今、地域の皆さんは、常々考えていらっしやると思います。

社会文化研究コースの新領域開拓への意欲

司会 次に、社会文化コースについてお願いします。

志村 社会文化コースは、総合科学部の中では、ただひとつ、単一の講座（社会文化研究）より成っています。したがって教官の数も比較的少数ですが、次のような新しい研究領域の開拓に意欲的に取り組んでおります。

高度産業社会への急速な変化に伴って、わが国の社会・経済はきわめて大きな構造的変容を遂げつつあります。こうした激動の中で、これまでの個別的な社会諸科学の枠を越えた新しい研究領域の開拓と総合化された専門知識をもつ人材が求められていま

す。社会文化コースはこうした情勢に応えるべく、これまでの法学、政治学、経済学、社会学といった個別的諸科学の枠にとらわれないで、「現代の国際的諸問題」、「国内の社会構造問題」、「地域開発にかかわる諸問題」などの研究と教育を進めることを目指しています。

カリキュラムの特徴としては、本コースの授業は、上述のような研究主題にそって、「社会構造研究を主とするもの」(Ⅰ群)と「技術・開発研究を主とするもの」(Ⅱ群)との2とおりの授業科目群を設けて、それぞれの領域において個別的な社会諸科学の枠を越えた総合的な学習、履修がおこなえるように編成されています。ここで、このような勉強がうまくいくか、どうかに関して、ひとつだけ注意しておきたいことがあります。それは一口に言えば、非常に多様な社会科学の領域を包含しているところに、ともすれば戸惑うことがおこりかねないということです。そこで履修する学生達にとっては、旧来の学問体系からすれば幾つかの専門分野を選択しながら新しい研究体系を作っていかなければなりません。相当、意識的な努力が必要です。それがないと生半可なものに終わってしまう懸念があります。

情報行動科学コースの三群にまたがる発展

司会 次に情報行動科学コースについてお願いします。

重中 情報行動科学コースは、二つの講座で構成されていますが、その一つは情報行動基礎研究講座で、他の一つは人間行動研究講座です。

研究面から申しますと、これは学生募集要覧にも掲載してありますが、個体および集団の各レベルにおける情報・生命・行動の構造・機能・制御などを三つの研究主題から総合的に研究を行うということを目指しています。結局、情報科学、行動科学、そしてその中間的な存在と申しましょうか、生命科学があるという形です。従って、このコースは「数理情報科学」、「生命科学」、「行動科学」の三つの群で構成されています。なかでも2番目の生命科学群は、教育・研究の両面で情報行動基礎研究講座と人間行動研究講座の両方にまたがった形です。数理生物学的な問題から始まって、分子・細胞・個体などのいろんなレベルでの生命科学の基礎的な問題に取り組んでいこうとしています。

実際に、情報行動科学コースに所属されている先

生方は、以前に数理統計学、計算機学、物理化学、細胞生物学、神経生理学、薬物生理学、心理学などを専攻して来られた方々で構成されていて、先生方の出身をみても、かなりバラエティーに富んでいます。このように、情報行動科学コースには文学部、教育学部、理学部、医学部、歯学部、工学部など様々な経歴をお持ちの先生方が居られる訳で、どのようにして総合的な教育研究を行うかということについては、このコースに課せられた大きな問題といえるでしょう。総合科学部が発足してから、このコースの先生方は出来るだけ頻繁に集い、議論し、また努力して参りましたが、また、境界領域的または総合的な教育や研究を完全になし得ているとは思われません。しかしながら、総合科学部の情報行動科学コースに所属しようとする学生さん達は、特に3年次生や4年次生になってくるにつれ、かなりアクティブな読書活動や研究活動をやるようになり、逆に先生方が尻を叩かれるという面もでてきています。とにかく、私達は情報行動科学コースの三つの群を、一つのコースとして、いかにうまく統合して行くかということが大きな悩みですが、この点についても先生方が真剣に考えられ、議論されておられる程度の進展も得られています。

ところで、学生諸君について申しますと、2年次生になる段階でコースを決定し、3年次生になる時に群を決定する訳ですが、その時、自分がどのように授業科目を取って行けばよいのか、どのように勉強したらよいかということで随分悩みがあるようです。これは、学生諸君からだけでなく、情報行動科学コースの先生方からも指摘がありました。そこで3年位前から情報行動科学コースに進もうとする学生には、こういう形で勉強をなささいと言う方向づけをある程度まで行っています。これについては、賛否両論色々ありました。今までのところ、学生諸君の評判も良いようです。やはり、三・四年次生での専門科目を取るためには、一般教育科目あるいは振替えの専門科目の単位をどのように取ればよいのかという点について、学生便覧に掲載しておくのもよいようです。いずれにしても情報行動科学コースの先生方と学生諸君が、今後とも協力し合って、よりよい方向にもって行きたいと思えます。特に、卒論研究の段階で各群にまたがって、また、コース間を越えて研究することが出来ることも、大きな目標の一つとしている訳です。それによって、先生方も少しずつではありますが進歩して行くと思